僕の友達の死の理由

凛人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕の友達の死の理由

【Ｎコード】
Ｎ２１１３Ｂ

【作者名】
凛人

【あらすじ】
ある日、折原祐司の元に親友、朝倉良平から一本の電話が入る。内容は中学の同級生だった月島愛美（まなみ）が事故で亡くなったというものだった。祐司にとってマナはかけがえのない特別な存在。一体彼女に何が起こったのか、祐司は死の真相を確かめる決意をする。

1　着信

そろそろ寝ようと明かりを消してベッドに入った時だった。
暗闇の中で眩しいぐらいのイルミネーションとバンプオブチキンのプラネタリウムが鳴り響いた。
ケータイが鳴っている。
今は夜の１２時、友達からだろうと思い枕元に置いてあるケータイに手を伸ばした。ケータイを開き着信先を確認する。その途端、折原祐司の表情が強張った。着信の相手は友達どころか親友の朝倉良平からだった。朝倉と電話で話すのはしょっちゅうの事だ。ただいつもと違うのは彼はこんな時間に電話をかけてきたりはしない。あるとしても特別大事な用事か『緊急事態』それだけだ。

『何かが起こった。』

祐司の頭の中でそんな考えが一瞬よぎったが咄嗟に通話ボタンを押していた。
「どうした？」
暗闇の中、打ちっぱなしのコンクリートの壁に祐司の声が響く。
「あのさ…」
「何だよ…？何かあったか……？」
「今、中学の時の友達から連絡あってさ、月島愛美（まなみ）の事、覚えてるか…？」

覚えてるも何もマナとオレは小学生の頃いつもベタベタで１番仲良くしていた女の子だ。
恋愛感情とかそういうものではなく、まだ子供だったし何より彼女はとても男勝りでいつも明るく女友達というより、どちらかと言うと男友達のような感覚だった。

頭も良く子供ながらきちんとした善し悪しを心得ていてオレが何か間違ったことをしようとするとちゃんと注意をしてくれる子だった。オレは本当に彼女を誇りに思っていた。
言わば親友だった。
そう。過去形だ。中学にあがり間もない頃、突然彼女に彼氏ができた。それが些細なきっかけで少しずつすれ違いが生じて来て、少しずつオレらの関係も崩れてきたのは事実だ。と言うのもオレが一方的にマナを避けるようになっていった。オレは彼女にとって特別な存在だと思っていたがそれは大きな勘違いだ。そう思い知らされているような気がしたんだ。そして今、朝倉からの電話で数年ぶりに彼女、マナの事を思い出した。
「……。マナがどうかしたのか……？」
マナが誰かと結婚でもしたのか？できちゃったのか？なあ？そうだろ？そうなんだろ？それ以外に何があるってんだよ？なあ…朝倉…。

「……。事故で…亡くなったそうだよ……。」

……？

一瞬、時が止まった。耳には何の音も届かなくなった。舌の上でそっと転がす。ジコデ…ナクナッタソウダヨ……ナクナッタソウダヨ……ナクナッタ……

「……。何だそれ……？」
「えっ？」
「まったく。タチの悪い冗談だな。」
「……。」
「だって冗談に決まってるだろ。悪質な嫌がらせだ。」
「ちょ…ちょっと待てよ。」
「でも…マナそんな、人に怨み買うような人間じゃないぞ。誰がこんな最悪な事。」
「……。そうなんかな…？」
「当たり前だろ。まっ、こんな事考える奴もちっちゃい人間だって事だよ。」
「……。そうだよ…な？…。」
「ああ……。」
「うん……。」
「……。でも……もし…」
「ん？」
「また何か情報入ったら教えてくれ……」
「……。分かってるよ……。」
「じゃあ…またな…。」
「ああ。おやすみ…。」

朝倉からの電話を切ると何件かメールが受信されていた。
内容はバイト仲間から『明日のシフト教えてくれ』といったものや友達から『今度の日曜、欲しいもんあるから原宿付き合ってくれよ』などと他愛のないものだった。ただその中に一通、いやがおうでも目を引いてしまうメールがあった。それは、普段は連絡を取らない、メモリーに入っているだけの旧友からだった。中学の友達。

“まさか……”

数秒間、無言のままケータイのディスプレイをじっと見つめた後、メールを開いた。

『中学の時、同級生だった月島愛美さんが亡くなったそうです。連絡先を知っている人に回してあげてください。』

2　願い

オレは言葉にならない思いで何度も何度もメールを読み返す。しかし何度読み返した所でメールの内容は『今度同窓会を開く事にしたので、ぜひ参加してください』とは変わらなかった。

このメールの差出人は松井早紀。中学時代の彼女はとても明るいキャラだった。彼女とは2年3年と同じクラスで祐司のことをただ一人『ユウジン』と変わった呼び方をしていたが実際は頭のいい優等生であったと祐司は記憶していた。ちなみに彼女も月島愛美とは小学校からの同級生だった。

しかしどう考えてもガセネタとしか捉えようのない、この情報もメールの差出人が松井早紀という事だけで祐司の中でほんの少しだが信頼性が出てきた。優等生であった松井早紀はこの根も葉も無い情報を知った時どう感じたのだろうか。すんなりと受け入れる事ができたのだろうか。信じる事ができたのだろうか。

『月島愛美さんが亡くなったそうです。』

一体どれだけの人間にこの情報は伝わっているのだろう。

朝倉だって早紀ちゃんだってマナとは“同級生”という事以外に特に接点はなかったはずだ。

当のオレ自身もマナとは高校一年の夏に、あるメールを送ったきりずっと連絡は取っていなかった。

月日が流れ、今現在、オレのケータイにはマナの番号やアドレスは入っていない。

もし仮に入っていたとしても電話をして出なかったらどうする？メールをして返ってこなかったらどうする？いや、そんな事を考えてはいけない。

そんな事を考えている時点で最悪の事態を想定している事になる。

頭の中に思い描くのは髪をポニーテールに結び、笑うと八重歯が除くきらっきらの笑顔をしたあの頃のマナだった。
そんなマナが死んだ？有り得えない、有り得ない。
ちなみに今日はエイプリルフールではないし、そうであったとしてもこんな嘘、許される訳がないだろう？第一“事故”というのも納得いかない。
オレの知っているマナは事故なんか起こさない。車だって運転なんかしないだろうし（祐司の思い込み）道路に飛び出して跳ねられる程バカではない。バカではないというのは頭の良し悪しではなく、勿論、勉強はかなりできていたが常識があるということだ。しかし祐司の頭の中に例外のケースも浮かんだ。
“車に跳ねられそうになっている子供か何かを助けた……？”
マナなら有り得ない話ではない。正義感が人一倍強かった彼女だ。
“でも…だからって……そんな……。”
祐司は思い煩う様子でどこか一点を見つめていた。そっとベッドから降り、電気は付けずにソファに座る。ＬＥＤ内蔵の置き時計に目をやった。０時４２分。
マナは人に怨みをかうような人間ではないけれど、今回は、今回だけはマナを良く思っていない誰かの嫌がらせであってほしい。そう願っていた。
ゆっくりと目を閉じる。祐司の頭の中では月島愛美との色々な過去の想い出が駆け巡っていた。

3　夜明け

ピピピピピ……。

けたたましく鳴り続ける電子音にオレは目を覚ました。いつの間にかソファに座ったまま寝てしまっていたようだ。今が、暑さの残る9月下旬で本当に良かった。真冬だったら間違いなく風邪を引いていただろう。ただでさえ、自分では気をつけているつもりなのだが毎年12月になると恒例のように風邪を引いてしまう。今は関係のない話だ。

大きく伸びをして立ち上がり、カーテンを開けた。雲が割れ、朝日がちょうど差し込んできてちょっと眩しい。いい天気だ。窓を開けて新鮮な空気を吸い込む。

―　太陽の香りがする。気持ちがいい。こんな空の下を散歩でもしたらどんな嫌な事も忘れてしまいそうだ。どんな嫌な事も。

しかし残念ながらそんな事をしている時間はない。現実に戻り窓を閉め、時計に目をやると8時ちょうどを指していた。いつもならこれから昼食用のおにぎりを作り、余ったご飯で朝食をとるのだが、今日はなぜだか『どっちもコンビニで済ませばいいや』と考えた。朝からそんな事をする気分にはなれなかった。

再びソファに座り込み、数秒間何やら考え込んだと思いきや、『たまにはいいか』の声と共に立ち上がり、着ていたTシャツ、ハーフパンツ、トランクスを脱ぎ捨ててバスルームへと向かう。

昨夜、風呂に入らなかった訳でも、ソファで寝ていたため当然、寝汗をかいた訳でもないが、無性に暑いシャワーを浴びたかった。祐司にとって特に必要性のない入浴は彼なりの贅沢なのだ。言わば自分へのご褒美。しかし今回の場合はご褒美ではなく気分転換だろう。本当の意味でのリフレッシュができる。

ハンドルをひねり冷水からお湯に変わるのを待っている間、余計

な事を考えそうだったので鏡の中の自分に声をかけた。
『おはよう。いい天気だな。今日もマイペースでがんばろうぜ。そっちの世界はどう？』そんな事をしている間に既にお湯へと変わっていた。頭から豪快に浴びる。頭の中はからっぽになり今はただ気持ちがいい。ただそれだけだ。途中から鼻歌を口ずさんでいたが、突然やんだかと思うとシャワーを止め、急いで体を拭き早々とバスルームを出ていってしまった。昨夜、寝る前にセットしておいた炊飯ジャーを思い出したのだ。

折原祐司は8月が誕生日で先月ハタチになったばかりだった。自分でも思った以上にハタチはまだまだ子供だと実感している。ただそれ以上に祐司自身がまだまだ大人になりきれていない。出身は福島だが進学のため現在、東京で一人暮しをしている。しかしなぜか2度も受験をしなかったため今は派遣社員として働き、それなりに充実のしている毎日を送っていた。

食器を洗い終え、洗顔をして歯を磨き、ワックスで髪型を整えてから作ったおにぎりをリュックに入れる。ケータイを取り、開けると昨日のメールが開いたままになっていた。
『月島愛美さんが亡くなったそうです』
思い詰めた表情で画面に目を落とし、無言のままケータイを閉じてポケットにしまう。そして部屋の鍵を握りしめ、ドアを開いた。

4　誰に聞いた？

「おはようございます。」
「おはよー。」
「おはよう。オリくん」
「オリ。おはよ。」

祐司の働いているこの職場は飯田橋にある。今住んでいる練馬からも一本で来れ、仕事内容もパソコンを使った簡単な事務作業だ。制服はなく私服で通勤可能で、堅苦しくない雰囲気を持っている。何より平日は本当に暇で、喋っていたりすれば一日が終わってしまう。そんな日もある。そういう所も祐司には向いているのだろう。

荷物をロッカーにしまい筆記用具などを手にし、この職場内で１番仲がいい山賀洋介の隣の席に座った。ここは自分の席はなく出勤した時に好きな席に座るシステムだ。

「おはよう。山賀さん。」
「おっ。おはよー。オリちゃん。」

山賀は何やらケータイをいじっている。

「なになに。またエロサイトでも見ちゃってる訳？」
「えー？違いますよー。オリちゃんじゃないんだから。」
「オレだってしませんよー。山賀さんじゃないんだから。」
「ははっ。」
「でもホントもう三十路なんだからいい加減彼女ぐらいつくらないとね。」
「オリちゃんだっていないじゃん。それにまだ２９だよ。失礼だな」
「さいですか。」
「それよりケータイ鳴ってるよ。」

山賀が指で合図をする。

「えっ。」

目を向けるとデスクに置いたケータイの着信ランプが光っていた。サイレントにしてあるため自分では気がつかなかった。
「バイブにしとけばいいのに。」
「デスクに置いてて急に震えるとびっくりするじゃん。」
「…ああそう。」
横目で山賀を一瞥しながらケータイを開く。メールの着信だったようで何件か溜まっていた。そういえば朝からメールの確認はしていない。何件かのメール中に朝倉からのものも含まれていた。躊躇いながらもメールを開く。

『メール見たら電話ほしい』

「……。あっ…。あのさっ。山ちゃん。」
「ん？」
「ちょっと。トイレ行ってきていい？」
「……。」
ケータイを手にそわそわしている祐司。
「長電話はだめだよ。」
「ごめん。ありがと。山賀さん。」
そう一言告げると、早々とオフィスから出ていってしまった。
「……。何かあったのかな？」

トイレの個室に入り鍵をかけると、直ぐさま朝倉に電話をかけた。
トゥルルルル…トゥルルルル…
祐司の耳にコール音が鳴り響く。

“早く出ろよ…。”

「もしもし。」
「あっ朝倉？オレだよ。」
「ああ。悪い。」
「いや、いいけど。今、大丈夫なのか？」
「うん。大丈夫。」
「そっか。で、何だよ？」
「あ、うん。昨日の事なんだけど…。」
「何か分かったのか？」
「昨日お前にデマなんじゃないかって言われて、オレなりに情報流した奴を調べようと思ったんだよ。」
「えっ…。で、それで…？」
「オレが聞いたのが林からなんだけどさ…」
「うん、」
「林に誰から聞いた？って聞いたらさ、」
「うん。」
「上原さんだって。」

“えっ……。”

「林、上原と月島と同じクラスだったじゃん？聞いたんだけど、上原と月島ってけっこう仲よかったらしいな。」
「……。わかった。」
「え？」
「じゃあまたな。サンキュ」
「あ、ああ。」

マナと上原さんが仲がよかった事は知っていた。

たしかあの二人同じ高校に進んだんじゃなかったか。確か。

“でも…もう…間違いないか……。マナは…。”

“マナは死んだんだ……。”

5　99%

電話を切った後、オレは朝倉にメールを入れた。

『告別式の日にちが分かったら教えてくれ。』

席に戻ると、山賀がケータイをいじりながら話しかけてきた。

「どうしたの？何かあった？」

「えっ。いや…別に…。」

「……。今日帰りにメシでも一緒に食おうか？おごるよ。」

祐司の暗く冴えない表情が少し明るくなった。

「……。マジっすか。じゃあお言葉に甘えちゃおうかな。」

「いつも節約して、ちゃんと自炊してたりしますもんね。だからオレからご褒美ですよ。今日もおにぎり作ってきたんですか？」

「もちろん。」

「やっぱり今日もおにぎりだけ？おかずなし？」

「ないね。」

「まあまあ。本当質素だねー。」

「シャラップ。みんな仕事しろオーラ出してこっち見てるよ。」

山賀が振り返ると、同僚数人が何やらひそひそ話をしながらこっちを眺めていた。

「あらー本当すいませんね。みなさん。」

その中の一人が答える。

「え。いや別に、そういう風に見てたんじゃなくて単純に仲いいなーって。何か本当の兄弟みたいだね。」

「えー兄弟ですか？友達じゃなくて？」

「えー友達にしては年離れすぎてるよね？」

周りに同意を求めるように顔をきょろきょろとさせている。周りもうんうんと首を縦に振っていた。

「そんなことないよねー？オリちゃん。」
祐司は黙りこんだまま俯き何か考え事をしているようだった。
山賀はそんな祐司を心配そうな眼差しで見ている。
「なになに？ケンカでもしたの？」
「ち、違いますよー。さー仕事仕事。」
山賀はパソコンに向かい、キーボードを慣れた手つきで叩きだした。そんな山賀を見て周りも仕事モードに入ったのを確認すると、さりげなく祐司のデスクを指でトントンと鳴らしてみた。
気付いた祐司が山賀に顔を向ける。
「え、何？」
「ちょっと大丈夫ですか？仕事はきちんとしてくださいよー？」
「わかってますよ。」
祐司がパソコンへと顔を移す。山賀が軽くため息をつき、再びケータイをいじり出した。
「ってケータイいじんのかよ？仕事すんじゃねーのかよ？」
「ハハハ。やっぱりオリちゃんはそうじゃないと。」
「ハハハハハ。」

“本当いい人だよな。山賀さん”

昼休み、祐司は山賀と浜川と一緒に休憩室で昼食をとっていた。浜川というのは先ほど山賀とやり取りをしていた彼女の事だ。年齢は３０代前半らしいが着ている服が若々しいのであまりそうは見えない。彼女は通称『ハマちゃん』と呼ばれている。

「オリ今日もおにぎりなの？」
「うん。」
「またふりかけ混ぜこんであるやつ？」
「今日は海苔。」
そう言いながら朝リュックに詰めて持ってきたおにぎりを取り出

した。
「へー。山ちゃんも見習って作ってきたら？」
浜川の目線は山賀の前に置かれているコンビニのサンドイッチや惣菜に向けられていた。
「えー。オレだって家ではたまに料理してるよ。」
「ふーん。例えば？」
「パスタとか。」
「ソース手づくり？」
「いや、レトルト。」
「そんなのは料理なんて言いません。」
「何ですか。そのベタなツッコミは。」
「あんたがベタな振り方するからでしょ。」
そんな二人のやり取りを聞き流しながら祐司は母親宛にメールを書いていた。

『小学生の時仲良かった月島愛美覚えてる？』
送信するとすぐに返事が返ってきた。どうやら今は家にいるらしい。
『覚えてるよ。』
やはりスラスラ打つのは難しいのだろう。母さんからのメールはいつも淡泊だ。“返信”ボタンを押し、少し考え込んだ後メールを書き始めた。

『事故で亡くなったらしい。』

今、祐司ははっきりと月島愛美の死を認識して文字にしている。
そして、それを誰かに伝えようとしている。
彼女の親しかった友人から得た情報だ。

たぶん、この噂は限りなく１００％に近い、真実なのだろう。まだ確実に１００％ではないのは祐司がまだ彼女の“死”を見ていないからだ。百聞は一見に如かず。マナの死を決定づける“何か”を目にした時、彼の中で１００％になるのだろう。そう考えていると、祐司の文面もまた淡泊なものになっていた。

6　何も知らない

メールを送信すると今度は少したってから返信が届いた。

『そっか。まだ二十歳には、なってないんでしょ？本当に残念だね。』

“二十歳…？”

何度もその言葉を口の中で転がしてみる。

“二十歳……二十歳……。”

「……ねえ、オリどうしたの？そんな怖い顔して。」

浜川が心配そうな表情をして尋ねてきた。

「……今日、何日……？」

「え…？今日？今日は27だよ。9月27日。」

“…9月27日……。”

体中の血の気がすーっと引いていく感じがした。

“……そんな……。”

「…ねえ…オリ…？」

「……ちょっと…電話してきます……。」

祐司は俯いたまま電話を片手に休憩室を後にした。

「オリ、何かあったのかな？」

「…かも、しれないね。」

山賀はどこか遠くを眺めていた。

祐司は電話をかけるため人がいない場所を探している。他人に聞かれたくない話になると思ったのだろう。トイレではいつ誰が入ってくるか分からない。その時祐司はある事を思いだした。

“たしか今日は上のフロアーは使ってなかったはず”

階段を駆け登ると人の気配はなかったが、念のためトイレの個室に入った。

急いでダイヤルをする。無機質なコール音が祐司の気持ちに拍車をかける。

「もしもし？」

「朝倉か？何度も悪い。」

今にも死んでしまいそうな声だった。こいつをここまでさせる“月島愛美”とは一体どんな人物だったのだろう。朝倉は頭の中で一瞬そんな事を考えた。

「…いや、大丈夫。オレも今メールしようとしてたとこだから。」
「…日にち分かったの？」
「いや…、その前にそっちは？何か分かったのか？」
「……。」
「……おい。どうした？」
「……分かったんじゃなくて思い出したんだよ……。」
「…え…、何を…？」

「…マナ…、１０月１日が誕生日……。」
「…え……！？ほんと…かよ……。」
「ああ…ほんと…何でだろうな……。親が１番ショックだろうな……。」
「……。」
「……それで、日にちは分かったのか？…」
「……いや、何人かに聞いてみた。そしたら…明日の新聞に載るらしいよ…。」
「……え……。」

「それより…今、お前に言われて気付いたんだけど、いや…お前ならとっくに気付いてるかもだけど……」
「……何だよ？はっきり言えよ…。」

「もしかしたら…月島の誕生日にお通夜か告別式ぶつかるかもな…。」

“……えっ……。”

「…えっ…えっ……？」
「…だって今日２７だぞ。ありえない話じゃないだろ。」
「……マジで……。」
「とにかく、それは明日すぐに連絡するから。」
「……ああ。頼む…。」
「……昨日の今日で何だけど、元気だせよ。お前まで同じ事になったらやだぞ。」
祐司の張り詰めていた表情が心なしか綻んだ。
「サンキュ。」
「また何かあったら電話してこいよ。」
「わかったよ。ありがとな。」
「じゃあまたな。」
「ああ、またな。」

明日の新聞にマナの情報が載る。
本当に。本当に？ここまで来たら間違いない。１００％に限りなく近い９９％。１００％になるのも時間の問題だ。明日の新聞にマナの情報が載る。マナはいつ死んだ？どうやって死んだ？どこで死んだ？病院か？即死だったのか？そもそもマナは今何をしている？学生？働いてる？どこで？地元？まさか東京で？唯一、今分かっている事はマナが死んでしまったという事とオレはマナについて何も知らないという事だけだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2113b/

僕の友達の死の理由

2010年10月28日04時31分発行